い。」と誇らしげにながめていました。
やがて昼もすぎ、太陽が阿武隈の山脈に傾きかけてきましたが田植えは、なかなか終りそうにもありません。
長者様はつぎつぎと使いを走らせて督励しましたが、もう一息というところで太陽は日隠山の彼方に没してしまいました。
じだ足踏んでくやしがった長者様は、たまりかねて黄金の靴をはいたまゝ、ジャブジャブと田の中に入るや、サッと日の丸の扇を開いて、「やい、お陽様、返せ、戻れ。」と大声でどなりました。
一度山かげに沈んだ太陽は、長者様の声に再びスルスルと一間ほど空高く戻りました。「さあ今だ。早く植えろ。」長者の叱咤にあった人々は、汗みどろになって残った田を植え終りました。
お陽様は静かに山の端にかくれ、あたりは黄昏につつまれました。
「どうだ、お陽様でも俺の力には従うんだぞ。」長者様は得意になって自慢話しに明け暮れていましたが、この事があってから長者の家運はだんだんと傾いて行きました。
「鉄道が出来るというんでな、工事が始まった頃、たくさんの糠塚が発掘されてなあ、これはたぶん長者屋敷で脱穀された米糠がつもりつもったもんだろう、と大騒ぎしたもんだよ。」